

ダルマティア語における

CT の発展について

Zur Entwicklung von CT im Dalmatischen

北村 一親

0. はじめに

今から正に100年前の1898年6月14日、Trieste(Trst)の *La Sera* 紙に載った下記の記事は、あるロマンス語に注目していた学者たちを絶望の底に追い落とした。

“... alle 6. 30, sulla strada che conduce alla località campestre *ai campi* e che si sta riattando, mentre si caricava una mina questa improvvisamente scoppiò uccidendo quasi sul colpo certo Antonio Udina, buon vecchietto di 77 anni, che stava sopra il sasso per tenere il ferro di carica... Era l'ultimo d'una generazione che se ne va ed era il solo che conosceva e parlava perfettamente l'antico dialetto romanico di Veglia.”¹⁾

アドリア海に浮かぶ Veglia (Krk, vikla) 島²⁾ 在住のダルマティア語最後の話者, Antonio Udina が4日前の6月10日に爆発事故で死亡したというニュースである。

この件に関して、詳しくは次章で述べるとして、現在では死語となったこのダルマティア語は、言語学的に見てロマンス諸語の中で推移的な位置にあり、³⁾ 地理的・歴史的に見て他民族に

1) *Dalm.*, I, Sp. 13-15.

2) 当時の Veglia 島住民の主な内訳は次のとおりである。

(1900年12月現在。単位：人)

イタリア系(土着)	1435
セルボ・クロアチア系	132
その他(ドイツ系, スロヴェニア系)	50
外国人(イタリア, フィウメ等から)	31

(Ebd., I, Sp. 14, Anm. 4.)

3) Jakob Jud の *Dalm.* に対する書評は最も早く出されたものの一つであり、その冒頭は次のように始まっている。

“Südlich von Fiume, im Golf von Quarnero, liegt die kleine Insel Veglia, deren Name unter den romanischen Sprachforschern wohl deshalb besonders bekannt geworden ist, weil sie bis vor wenigen Jahren den letzten Vertreter einer nun ausgestorbenen romanischen Sprache beherbergte: *Udina-Burbur*, der letzte Vegliote, der einzige, welcher uns lebendige Kunde von der im frühen Mittelalter an der österreichisch-adriatischen Küste gesprochenen *dalmatinischen* Sprache überliefert hat.” (Jud (1909) S. 430.)

この書評の刊行と同じ年に Th. Gartner や S. Pușcariu の書評も出され、イタリア語、レト・ロマンス語、ルーマニア語等々の分野からダルマティア語が注目されていたことが判る。

よる干渉を激しく被った環境にある特異な言語で、Vidos は Romania の歴史を考慮し、この言語に “Dalmatoromaans” の地位を与えた程である。⁴⁾

ダルマティア語におけるラテン語子音連続 CT の変化形は、多様な音形を呈しており、その多様性も周囲の諸言語との関係を見無視しては語れない。よって本稿ではダルマティア語におけるラテン語子音連続 CT の発展を周囲の言語も考慮に入れながら考察していくことにする。

1. ダルマティア語

1.1. ダルマティア語最後の話者について

考察する言語の終焉に関する事なので、まず初めにダルマティア語最後の話者である Twóne Udajna, Búrbur (上述の Antonio Udina) と彼の言語に言及しておく。

彼自身が次のように言っているとおり、以前はダルマティア語が日常、普通に使われていたようである。

“kwónd ke féro i vetrūni vív, koli vápto, ju koḡ tótji kwínt ju favlúa iḡ veklisúḡ. Perkú ju se jaj inparút kwónd ke ju fero pélo ke aváz tra jájn ke ju dát el prinsíp da favlūr kosájk iḡ veklisúḡ. perké me ju inparwót la maja nóḡ; e-l mi twóta e la maja njéna favlúa kosájk, iḡ veklisúḡ.”⁵⁾

イタリア語では veglioto⁶⁾ (vegliotto) と称されるダルマティア語 Veglia 方言は、この Udajna, Búrbur の談話の中で *veklisúḡ* として出てくる。これは語源的に見て Vikla (< VETULA) + -ENSIS + -ANUS から構成される。⁷⁾

彼の渾名、Búrbur (=burbero?, *Dalm.*, II, Sp. 176) は同名の又従兄弟、Twóne Udajna, Pola と区別するためのものである。(因に Twóne Udajna, Pola の父親も Twóne Udajna である。) 彼はダルマティア語 Veglia 方言とイタリア語 Veneto 方言を母語とし、他に標準イタリア語と

4) Vidos (1956) blz. 259-60.

5) *Dalm.*, II, Sp. 9. Bartoli による表記は北村が変更した。(以下、同じ。) その際、Hadlich (1965), 山末 (1977) も参照した。“Quand’ eran vivi vecchi, quegli otto (...), io con tutti quanti parlavo in vegliesano. Perchè avevo imparato quand’ero piccolo, che avevo tre anni che ho principiato a parlare così in v. Perchè m’insegnò la mia nonna; e il mio babbo e la mia mamma parlavano così in v.” (*Dalm.*, II, Sp. 10.)

6) Ascoli (1873) p. 435, n. 1.

7) Bec & Muljačić (1971) p. 399.

8) (次頁の注) セルボ・クロアチア語 ča 方言。(特に、Veglia 島の Verbenico (Vrbnik) 村の方言。) 我々、言語研究者がしばしば犯す誤りであるが、分析対象の言語は方言まで細かく意識するのに対し、それ以外の言語に対しては無神経に全て標準語を以て言語資料とする傾向がある。Hadlich (1965) もその例にもれず、セルボ・クロアチア語方言に対する注意を怠っているきらいがある。Hadlich (1965) の原著である博士論文を批評した Franolić (1963) p. 111 参照。

Peco (1985) str. 139-64 および同書に引用された B. Finka の同方言の区分図 (isto, str. 163) によると Veglia (Krk) 島ではセルボ・クロアチア語 ča 方言の i~e 方言であり、Cherso (Cres) 島を除いて Lussino (Lošinj) 島, Arbe (Rab) 島などの周囲の島嶼や東側対岸の Novi や Senj 等も ča 方言の i~e 方言 (“eine Mischung von Ekavština und Ikavština”, Leskien (1976) S. XXVII.) である。Cherso (Cres) 島は北側対岸の Istria (Istra) 半島東部と同じく ča 方言の e 方言領域である。(Novi や Senj の ča 方言に関しては Steinhauer (1973) 参照。)

ドイツ語を学び、レト・ロマンス語 Friuli 方言やセルボ・クロアティア語⁹⁾にも習熟していた。⁹⁾ Alexandru Rosetti の指摘するように、彼の言語は混淆言語の典型であり、収集した資料は慎重に扱うことが望まれるが、¹⁰⁾ 彼を調査した最後の二人の言語学者、Antonio Ive と Matteo Giurio Bartoli は Veglia 島と Quarnaro (Kvarner) 湾を介して対岸にある Istria (Istra) 半島出身で、Ive は西岸の Rovigno, Bartoli は東部の Albona という言語の坩堝と化した地域の出であり、正に最適の二人であったと言える。¹¹⁾

1.2. Udajna, Búrbur の死亡記事について

冒頭の Udajna, Búrbur (Antonio Udina) の死亡記事の内容はロマンス語学のみならず、言語学の常識となっており、1898年を以てダルマティア語は絶滅したとされている。試みに手許にある二つのロマンス言語学の概説書を繙くと次のように記述されている。(最初に、オランダで活躍したハンガリー人ロマンス語学者、Benedek Elemér Vidos の概説書から、次にイタリアのロマンス語学者、Carlo Tagliavini の概説書から取り出してみた。)

“In een noordelijke geïsoleerde uithoek van dit gebied, op het eiland Krk (It.Veglia), is het Dalmatisch, d. w. z. het Vegliotische dialect, tot ongeveer het eind van de XIXe eeuw gehandhaafd. De laatste Dalmaat (Veglioot) die het Vegliotisch in zijn jeugd nog gesproken heeft, was de in 1898 op 77-jarige leeftijd overleden Tuone Udaina Burbur.”¹²⁾

“Infine, in un'area appartata, nell'isola di Veglia (cr.Krk), presso una parte del popolo minuto, il Dalmatico si conservò fino al secolo scorso. L'ultimo conoscitore dell'antico Vegliotto (Antonio Udina, detto Burbur) morì nel 1898; oggi a Veglia non rimangono che pochissime parole di quest'antica parlata che è stata sostituita da una varietà veneto-giuliana e, specialmente, da un dialetto croato di tipo čakavo.”¹³⁾

ところが *Dalm.* 所収の次の箇所を読む者は、大いなる驚愕のため言葉を失う。少し長くなるが重要な問題なのでここに引用しておく。

“Schon auf dem Schiffskahne, der die Reisenden von dem (mitten im Hafen ankernden) Dampfer an die Riva bringt, hatte ich mit Freude gehört, daß der alte Udina -Búrbur, der letzte Vegliote, nicht nur nicht gestorben war — wie, allzufrüh, das Gerücht behauptete (. . .) — sondern daß er sich außerordentlich wohl befand und wahrhaftig nicht gedachte, allzubald zu sterben.

(前頁より。注8つづき) Ragusa (Dubrovnik) では、現在、セルボ・クロアティア語 što 方言が行われているが、同地のダルマティア語が絶滅した頃は ča 方言であった可能性が高い。Berk (1957), また Wrocławska (1988) s. 5-13, Peco (1985) str. 77-79 も参照。

9) *Dalm.*, I, Sp. 23-25.

10) Rosetti (1968) p. 71.

11) Ive の経歴は *Dalm.*, I, Sp. 59 に著述家辞典等から Bartoli によって簡略にまとめられたものがあり、Bartoli の経歴は ebd., I, Sp. 21, Anm. 1 に自己紹介がある。

12) Vidos (1956) blz. 311.

13) Tagliavini (1981) p. 375.

Bald darauf (es war erst beim Tagesanbruch) trat in das Speisezimmer meiner kleinen Locanda ein Greis, der mich freudig und kräftig auf vegliotisch begrüßte. Es war der Búrbur. Er hatte schon, trotz der frühen Stunde, von der Ankunft eines Freundes von ihm und seiner Sprache erfahren, der zwar beide bisher nicht gehört hatte, aber sich innigst darnach sehnte.”¹⁴⁾

何と, Udajna, Búrbur は死亡しておらず, その後も Bartoli と会っていたのである。また Udajna, Búrbur 自身の言葉も残っている。

“idí l-a zlungút la vajta máj!”¹⁵⁾

これが事実であったとしたならば, おそらく世界中の言語学関係の概説書・入門書にあるダルマティア語の絶滅に関する記述を訂正する必要が生じる。*La Sera* 以外の新聞に Udajna, Búrbur 死亡のニュースは掲載されなかったことから考えると同紙の誤報という可能性も高い。¹⁶⁾ 困ったことに当事者の一人である Bartoli のこの件に関する叙述が極めて曖昧で, 記録自体も日時があまり明確ではない。Veglia も含めて彼のダルマティア行は1897年9月, 1899年9月-10月そして1901年8月の3回である。次に挙げるのは Bartoli 自身による記録である。

“Zuletzt sei erwähnt, daß der Verfasser der vorliegenden Arbeit sich im Jahre 1897 (September) nach Veglia begeben hat, wo er das Glück hatte, den letzten Veglioten noch am Leben zu finden. —Im Jahre 1899 (September-Oktober) unternahm er wieder eine Reise nach Dalmatien, und zwar diesmal im Auftrage der Wiener Akademie der Wissenschaften, wie auch hier dankend bemerkt werden muß. —Eine dritte Reise fand im Jahre 1901 (August) statt. — Der zweiten Reise folgte ein Vorläufiger Bericht.”¹⁷⁾

“Die Abfassungszeit der Aufzeichnungen fällt ins Jahr 1897 (September), 1899 (Oktober) und 1901 (August). Wo das Datum nicht angegeben werden wird, ist der erste Besuch der Stadt Veglia gemeint.”¹⁸⁾

非常に不明解で, 疑問の多く残る表現である。Bartoli の大著, *Dalm.* を手にすれば, この著作が碩学によって書かれたものであると誤解されるかもしれないが, Bartoli は1873年11月22日の生まれなので,¹⁹⁾ 第1回調査の時に23歳, *Dalm.* 出版時で32歳という若さであり, また同書

14) *Dalm.*, I, Sp. 21.

15) Ebd., II, Sp. 32. “[Questo è segno che] dio ha prolungato la mia vita.” (Ebd.)

16) “Die übrigen istriatischen und dalmatinischen Zeitungen hatten die Nachricht nicht.” (Ebd., I, Sp. 15, Anm. 1.) これらの件に関しては, 既に山末 (1977) に言及がある。

17) Ebd., I, Sp. 13-14.

18) Ebd., I, Sp. 21-22.

19) 菅田(1994)73, 80頁, また下宮(1977)89頁上-下にも Bartoli の略歴があり, *Dalm.* の紹介も掲載されている。ただし, 下宮(1977)89頁下における *Dalm.* に関するの書誌記述は誤りが多く, ここで正しておく。まず, 書名副題のように記されている最後の部分 “Glossare, Texte, Grammatik und Lexikon” は Heft II のみのタイトルであり, しかも正しくは “Glossare und Texte—Grammatik und Lexikon” で, この部分の邦訳も「語彙・テキスト・文法・辞書」ではなく, 「単語集(語彙集)・テキスト—文法・語彙」であ

の随所に感じられる先行研究者、A. Ive への対抗意識も手伝って、記録の不備や文章の意図的な不明確化があったのかもしれない。片や A. Ive の方も Udajna, Búrbur の年齢を59歳と紹介しているのに反し、²⁰⁾ Ive 採録の Udajna, Búrbur 自身が語ったテキストによると、“de jéin sinuónta siápto,”²¹⁾ (「57歳」)とあり、数年にわたる調査であろうが、どこにも調査の日付が明記されておらず、研究方法にも問題があるのかもしれない。いずれにせよ Udajna, Búrbur の死亡年月日を現地で確認する必要がある。

1.3. ダルマティア語の言語資料

ダルマティア語はかつて南北に細長く分布しており、北は前述の Veglia 島周辺の Quarnaro (Kvarner) 湾から南はアルバニアの Durazzo (Durrës) まで広がっていた。Veglia (Krk), Zara (Zadar), Spalato (Split), Ragusa (Dubrovnik), Antivari (Bar) の諸地域で文証されるが、1900年頃に絶滅した Veglia の方言を除けば15世紀末までには全て死語と化した。他にはセルボ・クロアチア語を初めとする周辺の諸言語に借用された語彙や地名にその名残を留めている。Bartoli の *Dalm.* を評した論文で H. Gelzer は “Er zeigt, dass dalmatisch = vegliotisch + ragusanisch ist,”²²⁾ としたが、ダルマティア語の資料としては北部の Veglia 方言の方が南部の Ragusa 方言より遙かに豊富である。

Veglia 島のすぐ南に位置する Cherso (Cres) 島や Lussino (Lošinj) 島の古いロマンス語はダルマティア語 Veglia 方言とイタリア語 Istria 方言の中間体であったと言われる。²³⁾

最古のまとまったダルマティア語のテキストは、Zara (Zadar) の書状で、1325年のものであり、同地では他に1397年のものがある。前者については *Dalm.*, II, Sp. 262; Niculescu (1962) pp. 202-03; Sampson (ed.) (1980) pp. 203-04; Tagliavini (1981) p. 535 にテキストがあり、後者のテキストは *Dalm.*, II, Sp. 261; Tagliavini (1981) p. 535 にあり、複製が *Dalm.*, II, Sp. 308λ, Tagliavini (1981) p. 536 に、そして研究論文として Bertoni (1910), (1913) 等がある。

Veglia (Krk) の言語資料では、Bartoli によって採集された Udajna, Búrbur 等からの膨大なインフォーマント調査資料 (*Dalm.*, II, Sp. 7-98) が卓越しているが、この他に Giambattista Cubich による公刊・未刊の資料 (*Dalm.*, II, Sp. 97-144), Ive による資料 (*ADV*, pp. 134-48) があり、また *Parabola del figliuol prodigo* の Veglia 方言訳が Bartoli & Vidossi (1945) pp. 101-05 にある。

Ragusa (Dubrovnik) では、スラヴ人による支配下において住民の身分の高低を問わず、日常生活の言語としてはスラヴ語が用いられ、審理や商売のための文書の公用語としてはロマンス語 (ダルマティア語) が使われていた。²⁴⁾ Muljačić の時代区分による第3期 “Romansko-

る。(“Glossare” が何を意味するかは、第2分冊を開けばすぐに判ることであり、そこには Carabaich, Pozzo-Balbi, Velcich 等々によるダルマティア語単語集が掲げられている。) Heft I のタイトルは “Einleitung und Ethnographie Illyriens” である。本文はページ付けではなく、欄付けなので「317ページおよび467ページの2巻」ではなく、Heft I が XIV S.+318 Sp., Heft II が VIII S.+468 Sp. である。さらに、「ダルマティア人アドルフ・ムッサフィアに捧げられている」とあるのも Heft I の献辞であり (“Alla memoria di Adolfo Mussafia dalmata.” A. Mussafia は出版の前年、1905年に没しているため、その追悼記念であろう。), Heft II では “A Graziadio Ascoli giuliano e Wilhelm Meyer-Lübke elvezio” となっている。ちなみに G. I. Ascoli は出版の翌年、1907年に没している。

20) *ADV*, p. 116.

21) *Ibid.*, VI, c, 168-69.

22) Gelzer (1913) S. 257.

23) Skok (1943) p. 485; Solta (1980) S. 153. また Cherso における16世紀までの文化概観に関しては Ziliotto (1924) pp. 34-37 を参照。

slavenska simbioza” および第4期 “Romansko-slavenska simbioza u II fazi” に当たる。²⁵⁾ Ragusa (Dubrovnik) のダルマティア語的性格の強い文書として、*Dalm.*, II, Sp. 261 に1280年の文書が、*DE* に1347年 (str. 368-69), 1348年 (str. 369-71), 1363年 (str. 371-72) の各文書が収められている。15世紀中葉の Filippo Diversi (Philippus de Diversis de Quartigianis) の貴重なダルマティア語資料は、*Dalm.*, II, Sp. 259-60 にある。

2. ダルマティア語の CT

2.1. CT > pt

CT > pt を示す資料は次の通りである。²⁶⁾

dichidapto, 100 (Cubich), (*ADV*, II, a (p. 119b)), *dichidápto*, 144 (Cubich), *dikidopto*, 1 (Carabaich), *dikvapto*, 7, 76 (Udajna, Búrbur), “diciotto” < DECEM ET OCTO; *guapto*, 1 (Carabaich), *uapto*, 5 (Pozzo-Balbi), *vapto*, 9, 37 (Udajna, Búrbur), 87 (Depicolzuane), *vápto*, 9 (Udajna, Búrbur), “otto” < OCTO, *REW*, 6035.

これらダルマティア語における CT > pt を Ive はルーマニア語の反映とし、²⁷⁾ Ettmayer や Puşcariu, Grigore Nandriş もバルカン半島のルーマニア語やアルバニア語における CT > pt, ft と関連づけた。²⁸⁾ しかし、これらの語例は、全て数詞「8」および「18」であり、他に CT > pt の例は無い。そこで W. Meyer-Lübke, Alwin Kuhn 等はダルマティア語における CT > pt に疑問を投げかけた。²⁹⁾ “Der Einfluß von *sapto* hat *guapto* höchstens bewahrt, nicht erst gebildet.”³⁰⁾ という Bartoli 自身の発言もあり、W. Meyer-Lübke, A. Kuhn, や1957年には H. Barić がダルマティア語の CT > pt は類推の結果であるとし、さらに Tagliavini がこれを継承した。³¹⁾ すなわち、「8」のすぐ前の数である「7」(*sapto*, 1 (Carabaich), 78 (Udajna, Búrbur), 100 (Cubich), (*ADV*, II, a (p. 124a)), 146 (De Zonca), *siapto*, 5 (Pozzo-Balbi), *sjapto*, 11 (Udajna, Búrbur), *sjápto*, 37 (id.), “sette” < SEPTEM.) への類推によって pt を有するようになったと考えられる。ある数詞が隣接する他の数詞に影響されて発音が変化することはよくあることで、例えば古典期以前の北西ギリシャ語方言に属する Elis 方言において $\delta\kappa\tau\acute{\omega}$ の代わりに $\acute{\epsilon}\pi\tau\acute{\alpha}$ の類推で $\delta\pi\tau\acute{\omega}$ が使われたり、³²⁾ 現代日本語で「10本」が本来の「じゅっぼん」ではなく、「9本」の拗音に引かれて「じゅっぼん」と発音されるのも同じ現象であろう。

さらに詳しく調べてみると Bartoli が調査した Veglia 方言のインフォーマントの中に数詞の

24) (前頁の注) Skok (1931) p. 493.

25) *DE*, str. 339.

26) 数字のみの場合は “*Dalm.*, II, Sp.” を省略したものである。(以下、同じ。)

27) *ADV*, p. 158.

28) Ettmayer (1910) S. 9-10, Puşcariu (1937) p. 30, G. Nandriş (1951) p. 21.

29) Meyer-Lübke (1925) S. 641, Kuhn (1951) S. 147. および Kuhn を支持した Rosenkranz (1955) S. 277, Muljačić (1965) p. 1192 参照。他に O. Nandriş (1963) p. 261 も参照。

30) *Dalm.*, II, Sp. 369.

31) Meyer-Lübke (1925) S. 641, (1930) S. 2, Kuhn (1951) S. 147. Barić の学説は Rosetti (1965) p. 231 所引。Tagliavini (1981) p. 366 & 376.

32) 高津 (1975) 149頁。

「9」までも *pt* を有する語形に変えてしまった話者がいたことが判る。このインフォーマントは Bartoli が “Epigonen” と区分する人々の中の一人で、Margherita Witwe Fiorentin という名前の、“Überlieferung Depicolzuane” に属する人物である。数詞の「9」は他の資料において *nu*, 1(Carabaich), 100(Cubich), (*ADV*, II, a (p.122a)), 134, 144(Cubich), (*viant*) *nuf*, 5 (Pozzo-Balbi), *nuuf*, 147(De Zonca) < NOVEM という諸形が見られるが、Margherita Witwe Fiorentin では *napto*, 87(Depicolzuane) である。

1. joi, 2. dwoj, 3. troj, 4. tšatro, . . . 8. vapto, 9. napto. (id.)

上に挙げたものが *Dalm.* に採録された Margherita Witwe Fiorentin の数詞の全資料である。本来のダルマティア語では次のようになる。³³⁾

1. jojn, 2. doj, 3. tra, 4. kwatro, (kwatri)³⁴⁾, 5. tšjnk, tšjnk³⁵⁾, 6. si (s), 7. sapto, 8. vapto, (g)wapto, 9. nu, 10. dik.

この2種類の数詞を比較すれば判るとおり、Margherita Witwe Fiorentin の数詞は2～4において著しくセルボ・クロアティア語化されている。参考にセルボ・クロアティア語の数詞(1～4)の *ča/i*～*e* 方言形(Senj) と標準クロアティア文語形 (*što/je* 方言) を挙げておく。

ča/i～*e* 方言形(Senj)

1. jedan, (jedno, jedna), 2. dva, (dvi), 3. tri, 4. četire, (četre, četiri)³⁶⁾

標準クロアティア文語形 (*što/je* 方言)

1. jedan, (jedno, jedna), 2. dva, (dvi), 3. tri, 4. četiri³⁷⁾

以上、見て来たとおり、ダルマティア語における *CT* > *pt* は、自然な音変化ではなく、類推による変化と考えられる。ただし、ダルマティア語を取り巻く状況を考慮すると *pt* の維持段階でルーマニア語の *CT* > *pt* の結果としての *pt* を有するルーマニア語形に影響されたと考えの方が自然であろう。ロマンス語において *CT* とほぼ同様な変化をする *X[ks]* について言えば、ダルマティア語ではセルボ・クロアティア語に残された Ragusa 方言資料の *kopsa* (*kops(ic)a*), 294 < COXA, *REW*, 2292 は明らかにルーマニア語 *coapsă* との関連性が見い出される。³⁸⁾

2.2. CT の保存

CT が [*kt*] のまま保存されている資料を次に示す。これらは、ほとんどがセルボ・クロアティア語に残されたダルマティア語である。

33) *Dalm.*, II, Sp. 420 を基に北村が多少、改編した。

34) “Auch *kuātri* ist wahrscheinlich eine Neubildung Udina’s, obwohl es in altnordit. Texten belegt ist.” (Ebd., I, Sp. 258.)

35) *tšjnk* は古形。(Ebd., I, Sp. 259.)

36) Steinbauer (1973) p. 56. アクセント記号は省略した。

37) Maretić (1963) str. 221.

38) Meyer-Lübke (1890) S. 387 および Barić (Solta (1980) S. 145 所引)。ルーマニア語—ダルマティア語間における *CT* に関しては北村(1984) 9頁参照。なお Kuhn (1951) S. 147-48 ではセルボ・クロアティア語 *kopsa* はダルマティア語からではなく、ルーマニア語からの借用であるとしている。

afikat, 287 (Ragusa, 15世紀, 16世紀), Skok (1926-34) IV, S. 424 (Prčanj), “affitto”, *afiktavat*, 287 (Ragusa, 15世紀), “affittare” < -FICT-, *REW*, 3280; *flekta*, 290 (Ragusa, 18世紀), “coperta da letto con lenzuolo” < FLECTA; *octobre*, (Cubich), *ADV*, II, a (p. 122b), “ottobre” < OCTOBER; *octuanta*, 99 (Cubich), (*ADV*, II, a (p. 122b)), “ottanta” < OCTOGINTA; *sofrikati*, 299, “friggere” < -FRICT-; *trakta*, 302 (Ragusa), Skok (1926-34) III, S. 500 (Ragusa, Cavtat, Lastovo), *trataka*, Skok (1926-34) IV, S. 424 (Muo), “tratta”, “Zugnetz” < TRACTA; *traktâr*, Skok (1926-34) III, S. 500 (Žumberak), “Trichter” < TRAJECTORIUM.

上記の資料の他に, *octo*, 143-44, Anm. 14 (Cubich, I, T, N. 他は *uotto*), (*ADV*, II, a (p. 122b)), “otto” < OCTOがある。この語は Giambattista Cubich が採録したダルマティア語 Veglia 方言で, 彼の Trieste 写本 (Biblioteca Civica) および1861年に Rovigno で出た *L'Istriano* II 紙に連載された彼の論文 (“Di un antico linguaggio che parlavasi nella città di Veglia”) と1874年に Trieste で公刊された *Notizie naturali e storiche sull'isola di Veglia* において記録されているが, 彼の他の写本・刊本では *uotto* である。*L'Istriano* II 紙の Cubich 論文を見た Ascoli は,³⁹⁾ “*octo*, se esatto (rum. *opt*), sarebbe assai notevole.” と注記している。⁴⁰⁾ Bartoli は “Ganz unwahrscheinlich *octo*.” としているが, 上記の *flekta* や *trakta* に関しては, “*flekta* (wichtig . . .)”, “das allerwichtigste *trakta*” というように, これらの資料の重要性を認めている。⁴¹⁾ また Meyer-Lübke や Muljačić 等はダルマティア語における CT の保存を主張しており, 特に Meyer-Lübke は f によって *flekta* が比較的遅くに受け入れられたことが判り, この語は kt が遅くまで保存されていた重要な証拠になると言う。⁴²⁾ CT 保存説の根拠の一つとして PT の保存が引き合いに出されるが, ルーマニア語において PT は保たれたが, CT は pt に変化しているのだから, これはあまり説得力がない。*octobre*, *octuanta* は文化語である可能性が高い。

筆者は最近, ハンガリー語を経由してルーマニア語に新たに伝わったラテン語に関して簡単にまとめたが, CT が保存されるのは, 文化語として移入した語に限られ, 地域語として使われている語は実に多様な語形を示すことが判った。⁴³⁾ ダルマティア語の状況に関しては更に詳しく調べる必要があり, その際, ダルマティア語から CT を保存する語が消えた理由も説明しなければならぬ。また同時に CT が長い期間, 変化せずに維持された理由についてセルボ・クロアチア語側の詳細な検討が要求される。⁴⁴⁾

39) Ascoli (1873) p. 435, n. 1.

40) *Ibid.*, p. 437, n. 1.

41) *Dalm.*, II, Sp. 369. また *octo* に関して *Dalm.*, II, Sp. 18 (“Ebenso negiert”) も参照。

42) Meyer-Lübke (1925) S. 641-42, *DE*, str. 315.

43) Kitamura & Kubo (1998). “Ezekről a következőképpen osztályozhatjuk: első oláh *ct* < magyar *kt* < latin CT (vagy oláh *ct* < magyarországi latin CT), második oláh *ct*, *pt*, *ft*, *t* < magyar *kt*, *ft*, *pt* < latin CT, harmadik oláh *pt* < magyar *kt*, *pt* < latin CT, negyedik oláh *ct* < magyar *kt* < germán, szláv *cht*, ötödik oláh *pt* < magyar *kt*, *ft* < germán, szláv *cht*. Végül azt bizonyítjuk be, hogyha magyar nyelvben *kt*-n kívül léteznek *ft* és *pt*, akkor oláh nyelvben megjelennek *pt* és *ft*.”

44) Kitamura (1991) p. 112 において筆者は, “Estas formas con /kt/ se explican por cultismo y muestran que la penetración de las voces fue más tardía de lo que generalmente se cree.” としたが, 再考を要する。

2.3. CT > it [jt]

CT > it [jt] を示す資料は次の通りである。

aláite, 136 (Cubich), (*ADV*, II, a (p. 117a)), “le budella”; *dáit*, *ADV*, VI, c, 276, 314, (*Dalm.*, II, Sp. 162, 163), “detto” < DICTUS; *fait*, 143-44, Anm. 27 (Cubich, I. 他は *fuát*), (*fáit*, *ADV*, II, c, 66), “fatto”, *fáits*, 154 (Petris), (*ADV*, III, b, 136), cf. *Dalm.*, II, Sp. 18 (“Ebenso negiert”), “fatti” < FACTUS, -I; *fróit*, 151 (*frut*, De Zonca), *ADV*, VI, c, 334, (*Dalm.*, II, Sp. 164), “frutto” < FRUCTUS; *trajita*, Skok (1926-34) IV, S. 425 (Korčula), “Zugnetz” < TRACTA.

aláite を Alwin Kuhn は LACTEA に由来するものとしたが,⁴⁵⁾ Bartoli はこの語を “Ebenso negiert” とし,⁴⁶⁾ その語源を地方の文書に見られる (セルボ・) クロアティア語の *jelite* “Gedärme” に求めた。⁴⁷⁾ また Rosenkranz は *fait* を命令形 *fajte* (*Dalm.*, II, Sp. 4 (Carabaich), *fájte*, ebd., II, Sp. 81 (Überlieferung Udina)) による新しい形成であるとしている。⁴⁸⁾ *fróit* の *oi* は U の結果とも解釈でき,⁴⁹⁾ この語を Bartoli は “Weniger sicher” あるいは “also zweifelhaft” としている。⁵⁰⁾ *dáit* にしても Bartoli は “Ganz wertlos” としており,⁵¹⁾ -ái- はイタリア語 Veneto 方言からの借用語を Veglia 方言化した結果⁵²⁾ であると考えているようである。

このように CT > it を示す語は、ほとんどが語源が疑わしい語であるか、あるいはダルマティア語での自然な音変化ではない語であることが判る。よって CT > it はダルマティア語固有の音変化ではないと考えられる。かつて Georg Renatus Solta はルーマニア語、アルバニア語、ダルマティア語における CT の変化を考察して、バルカン半島の東から唇音化 (CT > pt, ft) が波及し、西からは口蓋音化 (CT > it [jt]) が波及したため唇音化がルーマニア語では完全であり、アルバニア語では半分に作用し、ダルマティア語では到達したのみで、反対に口蓋音化はダルマティア語やアルバニア語では生じたが、ルーマニア語には達しなかったという仮説を提案した。⁵³⁾ 口蓋音化はダルマティア語固有の変化ではなく、Solta 自身も認めているようにダルマティア語の CT > pt は前述のとおり類推による変化であるため、この仮説を CT の自然な音変化に対して認めることはできない。A. Kuhn によるバルカン半島の内陸における唇音化と沿岸における口蓋音化と、その前段階としての CT の保存という考え方も⁵⁴⁾ 同じ理由で受け入れることはできない。

Hvar 島や Korčula 島の (セルボ・) クロアティア語において *lakta* (*lakat*, “elbow” の属格), *nokta* (*nokat*, “nail” の属格) の代わりに *lajta*, “des Ellenbogens”, *nojta*, “des Nagels” が使われたり,⁵⁵⁾ アルバニア語で *drejtë* < DIRECTUS, *EWAS*, 74, “grade [sic], recht, gerecht”,

45) Kuhn (1951) S. 148, “Gekröse”.

46) *Dalm.*, II, Sp. 18

47) Ebd., I, Sp. 242. また Rosenkranz (1955) S. 277 では蓋然性の低い意味的仲立ち “Fischeingeweide” を認めるよりも語の音形から Bartoli の *jelite* の方が妥当であるとした。

48) Ebd.

49) Bec & Muljačić (1971) p. 407.

50) *Dalm.*, II, Sp. 369; I, Sp. 251.

51) Ebd., II, Sp. 369.

52) Ebd., I, Sp. 249, 251. イタリア語 Veneto 方言 (Venezia) では *dito*, “detto”, *DDV*, 242a.

53) Solta (1965) S. 299-300, (1980) S. 145.

54) Kuhn (1951) S. 148.

55) Solta (1980) S. 156.

LLA, 76, 82, 104, 122, *FGjSSh*, 369b-70a, dreit (gegërishte), AS, 58; fruit < FRUCTUS, 17世紀, *DLE*, 28; trajtë < TRACTUS, LLA, 61, 95, *FGjSSh*, 2012a; trajtoj < TRACTARE, LLA, 61, 72, 82, *FGjSSh*, 2012b; traitón < id., *EWAS*, 434, “baue, mache eine Speise an”などの語が見出されるという事実は、これらの地域で CT > it の変化に深く関わる言語接触がかつて存在したことを物語っている。⁵⁶⁾ 筆者はダルマティア語における CT > it はイタリア語 Veneto 方言から入ったものであり、これらがアルバニア語にも及んだと考えるが、詳細は別稿にて改めて述べることにする。⁵⁷⁾

2.4. CT > t (, tt)

CT > t (, tt) を有する語は豊富である。

aspetúr, 67 (Udajna, Búrbur), “aspettare”, *aspjata*, 47, 76 (id.), *spiáta*, ADV, VI, c, 290, (*Dalm.*, II, Sp. 162), “aspetta”, *spjatájte*, 43 (Udajna, Búrbur), “aspettate” < *ASPECTARE, *REW*, 3039, 2; *atuár* (“nicht wa”), 59 (Udajna, Búrbur), “attuario” < ACTUARIUS; *benedát* (*benedat*), *benedata*, 151-52 (De Zonca), *benedat*, *benedaat*, *bendaat*, *benedata*, *benedaata*, id., *benedát*, ADV, VI, c, 525, (*Dalm.*, II, Sp. 167), *benedata*, 124 (Cubich), “benedetto, -a” < BENEDICTUS, -A; *kadeljât*, 57 (Udajna, Búrbur), “cataletto” < *CATALECTUS, *REW*, 1759; *contruât*, 133 (Cubich), (*ADV*, II, a (p. 118b)), “contratto” < CONTRACTUS; *kwât*, 49, “cotto”, *kwât*, f., 49, (Udajna, Búrbur), *cuotta*, 133 (Cubich), (*ADV*, II, a (p. 119a)), “cotta” < COCTUS, -A; *dêt*, 66, 74, 75, *dêt*, 67, 70 (Udajna, Búrbur), *dat*, ADV, VI, c, 549, (*Dalm.*, II, Sp. 168), *duet* (*det*), 130 (Cubich), *ditu*, Niculescu (1962) 8 (Scrisoare din Zara (1325)), *dito*, *DE*, II (Ragusa, 1348), r. 27, “detto”, *diti*, *DE*, III (Ragusa, 1363), r. 24, “detti” < DICTUS, -I; *dikduât*, ADV, VI, a (p. 134b), (*Dalm.*, II, Sp. 155), “diciotto” < DECEM ET OCTO; *dispjât*, 66 (Udajna, Búrbur), “dispetti” < DESPECTI; *dotwâr*, 7, *dotwâr*, 47 (Udajna, Búrbur), “dottore” < DOCTOR; *drat*, 110, 119, 139 (Cubich), (*ADV*, II, c, 8), *dret*, Niculescu (1962) 24 (Scrisoare din Zara (1325)), *indret*, Sampson (ed.) (1980) 91, l. 32), *drata*, 141 (Cubich), *drâta*, ADV, VI, c, 476, (*Dalm.*, II, Sp. 167), “dritto, -a” < DIRECTUS, -A; *fât*, 49, 51, *fat*, 53, 57 (Udajna, Búrbur), 119 (Cubich), *fât*, 82 (Überlieferung Udina), *fwât*, 53, 61 (Udajna, Búrbur), *fwat*, 57 (id.), *fuat*, 141 (Cubich), *fuôt*, ADV, VI, c, 229, 236, 247, 250 (*Dalm.*, II, Sp. 159, id., id., 160), “fatto” < FACTUS; *frît*, 49, *friât*, 51 (Udajna, Búrbur), “Subst.?”), “fritto” < FRICTUS; *frut*, 41 (Udajna, Búrbur), 151 (*frôit*, De Zonca), ADV, VI, c, 525, (*Dalm.*, II, Sp. 167), *fruôt*, 4 (Pozzo-Balbi), “frutto”, *frât*, 43 (Udajna, Búrbur), “frutti” < FRUCTUS, -I; *jetwôr*, 77 (Udajna, Búrbur), “gettare”, *jetûme*, ADV, VI, c, 251, (*Dalm.*, II, Sp. 160), “gettammo”, cf. *ADV*, p. 173b, *jetwôt*, 55 (Udajna, Búrbur), *jetât*, ADV, VI, c, 252, (*Dalm.*, II, Sp. 160), *ADV*, VI, c, 415, (*Dalm.*, II, Sp. 166), “gettato” < *JECTARE, *REW*, 4568; *liat*, 3 (Carabaich), 147 (De Zonca), *l'ât*, 7, *ljât*, 31, (Udajna, Búrbur), *l'iat*, 124 (Cubich), (*liât*, *ADV*, II, a (p. 121a)), *liad*, 125-26 (Cubich), *l'êt*, 69

56) H. Barić は、これらのアルバニア語をダルマティア語に由来するとしているらしい。(Rosenkranz (1955) S. 277 所引。)

57) Kitamura (1991) p. 110, 112 に簡単に述べたことがある。

(Udajna, Búrbur), “letto”, *liech*, pl., 119 (Cubich), “letti” < LECTUS, -I; *l’at, lát, lwót*, 51 (Udajna, Búrbur), “latte”, cf. *Dalm.*, II, Sp. 17 < *LACTE, *REW*, 4817; *maltratuót*, *ADV*, VI, c, 260, (*Dalm.*, II, Sp. 160), “maltrattate” < -TRACTA-; *nwát*, 7, 31, 35, 41 (Udajna, Búrbur), 84 (*nuat*, 85), 86, 87 (Depicolzuane), *nuat*, 141 (Cubich), 150 (De Zonca), *nuát*, 123 (Cubich), (*ADV*, II, a (p.122b)), *ADV*, VI, c, 219, 221, (*Dalm.*, II, Sp.159, id.), *nuât*, 3 (Carabaich), *nót*, 89 (Depicolzuane), *nuot*, 6 (Velcich), *nwót*, 83 (Depicolzuane) (cf. *nwōč*, 82 (id.)), “notte”, *nuâte*, pl., *ADV*, p.176b, *nwát*, pl., 35, 67 (Udajna, Búrbur), “notti” < NOCTE, *REW*, 5973; *miznwat*, 37 (Udajna, Búrbur), “mezzanotte” < -NOCTE; *otóber*, 38 (Udajna, Búrbur), “ottobre” < OCTOBER; *otwónt, otwúnt*, 78 (Udajna, Búrbur), *otuonta*, 3 (Pozzo-Balbi), “ottanta” < OCTOGINTA; *pjât*, 27, *pjat*, 45 (Udajna, Búrbur), “petto” < PECTUS; *strát*, 74 (Udajna, Búrbur), *strat*, 109 (Cubich), *striat*, 79 (Udajna, Búrbur), *strwát*, 74 (id.), “stretto”, *striáta*, f., 27 (id), “stretta” < STRICTUS, -A; *tját*, 53 (Udajna, Búrbur), “tetto” < TECTUM; *trat*, 302 (Ragusa, 16 世紀), “tratto”, *trwóta*, 34 (Udajna, Búrbur), *truóta*, *ADV*, VI, c, 231, (*Dalm.*, II, Sp. 159), *trata*, 302 (Lesina (Hvar), 16 世紀), *tratta*, *DE*, I (Ragusa, 1347), r. 18, “tratta” < TRACTUS, -A; *tratúre*, *ADV*, VI, c, 556, (*Dalm.*, II, Sp. 168), “trattare”, *tratuót*, *ADV*, VI, c, 555, (*Dalm.*, II, Sp. 168), *tratát*, 302 (Ragusa, 16 世紀), “trattato” < TRACTARE; *vvat*, 29 (Udajna, Búrbur), *vuat*, 147 (De Zonca), *wat*, 80 (Udajna, Búrbur), *uotto*, 100 (Cubich), 144 (id., B, G, M), (*ADV*, II, a (p. 125b)), “otto” < OCTO; *vátvo*, 9 (Udajna, Búrbur), *vuátvo*, *ADV*, VI, c, 542, (*Dalm.*, II, Sp. 167), “ottavo” < OCTAVUS.

CT > t がほとんどで、CT > tt は、*cuotta, tratta, uotto*, の 3 語である。後者はイタリア語の書法に引かれた結果であり、音声の差異を表現したものではないことが上記の一覧よりわかる。CT > *tt > t⁵⁸⁾ という一連の変化過程を認めるかどうかという議論における *tt とは関係がない。Bartoli は *det* を “es ist aber jung” とした。⁵⁹⁾

また、Bartoli は、CT > t をイタリア語 Veneto 方言の侵入によって出来た結果であるとし、*dotuár, drat, friat, fuat, kuat, l’at, nuat, otuónt, piat, spiata, strat* 等の語はイタリア語 Veneto 方言の影響であると考えた。⁶⁰⁾ Meyer-Lübke, A. Kuhn, Bec & Muljačić 等この説を支持する学者は多く、詳しい検討もなしに支持する Hadlich のような研究者までいる。⁶¹⁾ 筆者は、いくつかの理由から CT > t がイタリア語 Veneto 方言の影響で成立したものではないと考えている。そこで、上記のダルマティア語に対応するイタリア語 Veneto 方言 (Venezia) 形を次に示す。(アクセント表記はそのまま残した。)

aspetâr, “aspettare”, *DDV*, 47a, *aspêto*, “aspetto”, 47b; *benedeto, benediò*, “benedetto”, 75b; *contrato*, “contratto”, 193b; *coto*, “cotto”, 204c-05a; *dito*, “detto”, 242a; *disdôto*, “diciotto”, 241a; *despetar*, “scollare”, 232b, *despêto*, “dispeito”, 232c; *dreto, drîto*, “diritto”, 247b-c, *dretôn, driton*, “ritto”, 247c, *dretîra, dritura*, “dirittura”, 247c; *fato*, “fatto”, 263b; *frito*, “fritto”, 288c; *fruto*, “frutto”, 290a-b; *geto*, “getto”, 303c; *leto*,

58) Bec & Muljačić (1971) p. 412.

59) *Dalm.*, II, Sp. 403.

60) Ebd., I, Sp. 255; II, Sp. 404.

61) Meyer-Lübke (1925) S. 642, Kuhn (1951) S. 148, Bec & Muljačić (1971) p. 407, Hadlich (1965) p. 85.

“letto”, 367b; *late*, “latte”, 362b; *note*, “notte”, 444a; *oto*, “otto”, 459c; *peto*, “petto”, 499a-b; *streto*, “stretto”, 714c, 15a; *tratâr*, “trattare”, 764b, *trato*, “tratto”, 764c-65a.

これらのイタリア語 Veneto 方言 (Venezia) 形は、母音の発展の点においてダルマティア語と明らかに異なる。前にも少し触れたように、Bartoli は、この問題を解決するためか、イタリア語 Veneto 方言からの借用語をダルマティア語化 (Veglia 方言化) した結果であると考えたが、⁶²⁾ この解釈も限度があり、他の変化形に比べて、この CT > t の変化形が圧倒的多数であることなども考慮に入れば、Bartoli の言うように CT > t が不規則な変化形⁶³⁾ ではなく、CT > t の変化こそがダルマティア語固有の変化であると筆者は推定する。⁶⁴⁾ CT > t を有する語形の母音は完全にダルマティア語固有のものである。例えば、閉音節において A > wa, Ò > wa, Ê > ja, 開音節において A > u 等である。Meyer-Lübke も OCTO > *wat* の変化が早い時期に生じたことを認めている。⁶⁵⁾

さらにイタリア語 Veneto 方言側の問題であるが、ダルマティア語 (Veglia 方言および Ragusa 方言) と接触を開始し始めたのは Hadlich によれば11世紀, Muljačić によると12世紀である。⁶⁶⁾ 筆者の研究に基づく、12~13世紀にかけてイタリア語 Veneto 方言では CT の変化形が it > t の推移期にあたる。⁶⁷⁾ ここにイタリア語 Veneto 方言の古文獻における CT の変化形を簡単に示しておく。

Giacomino da Verona, *De Jerusalem celesti*. (13世紀), *noito*, *MADI*, p.27, *noto*, *ibid.*, p.29, < NOCTE, *fruiti*, *ibid.*, p.28, < FRUCTI; Giacomino da Verona, *Della caducità della vita umana*. (13世紀), *fruito*, *ibid.*, p.72, < FRUCTUS; Patecchio da Cremona (?), *Proverbia que dicuntur super natura feminarum*.⁶⁸⁾ (13世紀), *noite*, *CI*, p.178, *note*, *ibid.*, < NOCTE, *fruitante*, *ibid.*, p. 180, < FRUCT-, 他に *fato*, *drete*, *ditatore*, *dito* 等; *Atti dei Podestà di Lido Maggiore (Lio Mazor)*. (1312-19), *peito*, *MDLM*, 3r. l. 12, 10v. l. 20. Cf. Ascoli(1873)p. 471, n. 1. < PECTUS.

この時期のイタリア語 Veneto 方言がダルマティア語に入ったのならば、当然、CT > it を有する語形が前節で考察したものより多く見られてもよいはずである。しかし実際は CT > it がごくわずかで、CT > t の方がはるかに多いので、やはり、CT > t がダルマティア語固有の変化形であると考えざるをえない。すなわち、CT > t が借用語だとするのならば、it 型の借用語を排除した理由が理解できず、逆に CT > t が固有の変化形だとするのならば、t 型の固有語が it 型の外来語をできる限り排除したと推測できるのである。

Rosenkranz は周辺のスラヴ語において CT > kt が古く、CT > t が新しい変化のように言っ

62) *Dalm.*, I, Sp. 249.

63) Bartoli (1908) p. 10.

64) かつて筆者は、Kitamura (1991) p. 112 において次のような結論を簡単に披露した。“Llegamos a la conclusión de que es indígena la evolución del grupo latino /kt/ en /t/ [en el dalmático].”

65) Meyer-Lübke (1925) S. 642.

66) Hadlich (1965) p. 50, *DE*, str. 339.

67) Kitamura (1991) p. 112.

68) Lombardia 方言で書かれたが、長い間、Venezia にあり、そこで修正された経歴を有するので、取り扱いには、一応、注意を要する。

ているが、⁶⁹⁾ これまで見てきたとおり資料的にはどちらも15～16世紀のものであり変化の新旧を決定することはできない。ちなみにブルガリア語ではCT > tであるという。⁷⁰⁾

2.5. その他のCTの変化形

CT > k の例として, *lik*, *ADV*, VI, c, 506, (*Dalm.*, II, Sp. 167), “latte” がある。Ive は “*Resta il c e tace il t,*” として語源を LACTE に求めているが,⁷¹⁾ この語は極めて疑わしい。⁷²⁾

noč, 41 (Udajna, Búrbur), 90 (Depicolzuane), *nwóč*, 82 (Überlieferung Udina), “notte” はセルボ・クロアチア語からの借用である。⁷³⁾ *ča/i~e* 方言形 (Senj) も標準クロアチア文語形 (*što/je* 方言) も *noč* である。⁷⁴⁾ *straz*, 39 (Udajna, Búrbur), “stretto”, *stréz*, f., 74 (id.), “stretta” < STRICTUS, -A は更なる考察が必要である。

スラヴ語に借用された語として, *ločika*, Skok (1931) p. 495 は LACTUCA を語源とするのは困難である。⁷⁵⁾ その他の借用語を揚げておくと, 詳細な検討は今後の課題である。*kotorada* < CATARACTA, Skok (1931) p. 496; チェコ語 *trachtýř* < TRAJECTORIUM, *EWAS*, 421.

3. 結 論

以上, 考察してきたようにダルマティア語におけるCTの発展は, 固有の母音を伴い, 数量的にも圧倒的に多いCT > tがダルマティア語本来の変化形であり, CT > itはイタリア語 Veneto方言からの借用, CT > ptは類推による変化形であり, CT > ktは不確実で, 今後の課題となった。A. Graur と A. Rosetti の言うようにダルマティア語はCTの発展においてルーマニア語やアルバニア語と同じ道をたどらなかったのである。⁷⁶⁾

今回は紙幅の関係上, 論じ尽くせなかったが, この問題はダルマティア語内部に止まらず, 東へアルバニア語, ルーマニア語, 西にはイタリア語 Veneto方言, レト・ロマンス語, イタリア語 Lombardia方言, 南イタリアのギリシャ語といった巨視的な視野から眺めると実に興味深いテーマである。Bartoli はロマンス諸語を das Apennino-Balkanische と das Pyrenäo-Alpinische に二分して,⁷⁷⁾ イタリア語 Abruzzo-Puglia方言にCT > *pt > ttを想定し, ダルマティア語のCT > ptやルーマニア語のCT > pt, アルバニア語のCT > ftとの共通性を考えたが,⁷⁸⁾ ダルマティア語に関して本稿で考察したことから, またイタリア語 Abruzzo-Puglia方言の *ptが証明できないことなどから das Apennino-Balkanischeにおける唇音化の設定は無理である。⁷⁹⁾ この点でBartoliと対立するClemente Merloは特に音声面でダルマティア語とレト・ロマンス語(ラディン語)との一致を見出した。⁸⁰⁾ レト・ロマンス語 Friuli方言形 *aspetâ*,

69) Rosenkranz (1955) S. 278.

70) Solta (1980) S. 158. “teto, “Dach” < TECTUM”.

71) *ADV*, p. 158.

72) *Dalm.*, I, Sp. 64, II, Sp. 411.

73) *Ebd.*, II, Sp. 369.

74) Steinbauer (1973) p. 74.

75) *Dalm.*, II, Sp. 369, *DE*, str. 265.

76) Graur & Rosetti (1935) p. 66.

77) *Dalm.*, I, Sp. 297-308.

78) *Ebd.*, I, Sp. 280.

79) Vgl. Jud (1909) S. 434, Anm. 10, Kuhn (1951) S. 147.

80) Merlo (1910).

“aspettare”, *DESF*, I, 114b; vct, “otto”, Frau(1984)p.52, *REW*, 6035; pyet, < PECTUS, *REW*, 6335. 等をダルマティア語と比較すれば両者の関係が容易に理解できる。最後の pyet は、さらに西ロマンス語へと連なる可能性も示している。⁸¹⁾ ただし, Herman József が示した帝政期ラテン語の B ~ V の混同に関する分布におけるダルマティアとイタリア南部の一致や,⁸²⁾ Skok が説くダルマティア語 Ragusa 方言とイタリア語南部方言との共通性も看過できない。⁸³⁾

ダルマティア語の CT の発展について考察してきたが、最後に大いなる問題を提示して本稿を終えたい。まず, “We must revise Bartoli’s placing of Vegl. in the East Romance group, and consider Vegl. rather a linguistic system in which, according to the normal criteria, the East-West division of Romance languages does not apply.”⁸⁴⁾ という Hadlich の発言に対してである。かつて大陸ケルト語が死滅寸前の時期に p-Celtic と q-Celtic 双方の特徴を有するという一種の混乱状態に陥ったことを想起すれば,⁸⁵⁾ 死滅寸前のダルマティア語 Veglia 方言が同様な混乱状態であったことは想像に難くないのではないか。次の問題は、ダルマティア語の Veglia 方言と Ragusa 方言を比較すると、次第に判ってくることであるが、果たして、これらは同一言語内の二つの方言と見なして良いものであろうか。ダルマティアという地理的な観念が先行して、この地域で話されていた言語を分類しているのではないだろうか。甚だ疑問であり、今後の研究が待たれる。

略語・参考文献一覧

- ADV* = Ives, A. (1886) “L’antico dialetto di Veglia,” *AGI*, IX, 115-87.
AS = Meyer, G. (1897) *Albanesische Studien*, VI. Wien.
 Ascoli, G. I. (1873) “Saggi ladini,” *AGI*, I, 1-556.
 Bartoli, M. G. (1908) “Note dalmatiche,” *ZRPh*, XXXII, 1-16.
 Bartoli, M. & Vidossi, G. (1945) *Alle porte orientali d’Italia*. Torino.
 Bec, P. & Muljačić, Ž. (1971) “Dalmate,” in *Manuel pratique de philologie romane*, II. Paris, pp.393-416.
 Berk, C. A. van den (1957) *Y a-t-il un substrat čakavien dans le dialecte de Dubrovnik?* ’s-Gravenhage.
 Bertoni, G. (1910) “Sulla lettera di Zara del 1397,” *ZRPh*, XXXIV, 474-76.
 — (1913) “Ancora la lettera di Zara del 1397,” *ZRPh*, XXXVII, 231.
CI = Monaci, E. (1955) *Crestomazia italiana dei primi secoli*. Roma-Napoli-Città di Castello, nuova edizione.
Dalm. = Bartoli, M. G. (1906) *Das Dalmatische. Altromanische Sprachreste von Veglia bis Ragusa und ihre Stellung in der apennino-balkanischen Romania*. 2 Hefte. Wien.
DDV = Boerio, G. (1856) *Dizionario del dialetto veneziano*. Firenze, ristampa, 1983.

81) Vgl. *FEW*, VIII, S. 113b.

82) Herman (1971) p. 211, carte II.

83) Skok (1931) p. 489.

84) Hadlich (1965) p. 88.

85) Cf. Whatmough (1954) p. 400, (1970) pp. 68-76, 蛭沼(1971) 4-5頁, 北村(1992) 3-6頁。

- DE = Muljačić, Ž. (1962) "Dalmatski elementi u mletački pisanim dubrovačkim dokumentima 14. st.," u *Radu JAZU*, knj. 327, str. 237-380.
- DESF = Zamboni, A. et al. (1984) *Dizionario etimologico storico friulano*, I. Udine.
- DLE = Roques, M. (éd.) (1932) *Le Dictionnaire albanais de 1635*, I. *Dictionarium latino-epiroticum per R. D. Franciscum Blanchum*. Paris.
- Doria, M. (1989) "Dalmatisch/Dalmatico," in *Lexikon der romanistischen Linguistik*, III. Tübingen, pp.522a-36b.
- Ettmayer, K. von (1910) "Benötigen wir eine wissenschaftlich deskriptive Grammatik?" in *Prinzipienfragen der romanischen Sprachwissenschaft*, I. Halle a. S., S.1-16.
- EWAS = Meyer, G. (1891) *Etymologisches Wörterbuch der albanesischen Sprache*. Leipzig, Reprint, 1982.
- FEW = Wartburg, W. von (1946-83) *Französisches etymologisches Wörterbuch*. I-XXI(1), XXIV. Tübingen & Basel (Bâle).
- FGjSSh = Akademia e Shkencave e RPS të Shqipërisë (1980) *Fjalor i gjuhës së sotme shqipe*. Tiranë.
- Franolić, B. (1963) "Review of Roger Lee Hadlich, "The Phonological History of Vegliote." A Diss. for the Doctorate of Philosophy in the Univ. of Michigan, 1961," *Word*, XIX, 111-13.
- Frau, G. (1984) *I dialetti del Friuli*. Udine.
- Gelzer, H. (1913) "Beiträge zum Dalmatischen und Albanesischen," *ZRPh*, XXXVII, 257-86.
- Graur, A. & Rosetti, A. (1935) "Sur le traitement des groupes lat. CT et CS en roumain," *Bulletin Linguistique*, III, 65-84.
- Hadlich, R. L. (1965) *The Phonological History of Vegliote*. Chapel Hill.
- Herman, J. (1971) "Essai sur la latinité du littoral adriatique à l'époque de l'Empire," *Sprache und Geschichte. Festschrift für Harri Meier zum 65. Geburtstag*. München, pp. 199-226.
- 蛭沼 寿雄 (1971) 「ハーヴァードのケルト学者」『ケルト研究』2号, 1-5頁.
- Jud, J. (1909) "[Zum Dalmatischen.] Besprechung von: Matteo Giulio Bartoli, *Das Dalmatische*. Wien, 1906," in *Romanische Sprachgeschichte und Sprachgeographie*. Zürich-Freiburg i. Br., Nachdruck, 1973, S.429-45.
- 北村 一親 (1984) 「ルーマニア語におけるラテン語CT/kt/」(稿本)
—— (1992) 「ケルト語の特異性」『アルテス・リベラレス』50号, 1-16頁.
- Kitamura, K. (1991) "El cambio fonético del grupo latino /kt/ en los romances y el albanés," 『名古屋大学人文科学研究』20号, 109-118頁.
- Kitamura K. & Kubo H. (1998) "Magyar elemek az oláh nyelvben," 北村一親(編)『岩手大学人文社会科学部比較言語学研究室論集』盛岡.
- 高津 春繁 (1975) 『ギリシャ語文法』東京, 6刷.
- Kuhn, A. (1951) *Romanische Philologie*, I. Bern.
- Leskien, A. (1976) *Grammatik der serbo-kroatischen Sprache*. Heidelberg, zweite Auflage.
- LLA = Haarmann, H. (1972) *Der lateinische Lehnwortschatz im Albanischen*. Hamburg.
- MADI = Mussafia, A. (1864) *Monumenti antichi di dialetti italiani*. Bologna, ristampa,

1980.

- Maretić, T. (1963) *Gramatika hrvatskoga ili srpskoga književnog jezika*. Zagreb, treće izdanje.
- MDLM = Levi, U. (1904) *I monumenti del dialetto di Lio Mazor*. Bologna, ristampa, 1984.
- Merlo, C. (1910) "Vegliotto e ladino," *Rendiconti del Reale Istituto Lombardo di Scienze e Lettere*, XLIII, 271-81.
- Meyer-Lübke, W. (1890) *Grammatik der romanischen Sprachen*, I. Hildesheim, Nachdruck, 1972.
- (1925) "Beiträge zur romanischen Laut- und Formenlehre, VI, Die Gruppe *ct*," *ZRPh*, XLV, 641-61.
- (1930) *Rumänisch und Romanisch*. București.
- Muljačić, Ž. (1965) "La posizione del dalmatico nella România," in *Linguistique et philologie romanes: X^e Congrès International de Linguistique et Philologie Romanes, Actes*, III, Paris, pp.1185-94.
- Nandriš, G. (1951) "The Development and Structure of Rumanian," *Slavonic and East European Review*, XXX, 7-39.
- Nandriš, O. (1963) *Phonétique historique du roumain*. Paris.
- Niculescu, A. (1962) "Limba dalmată," in I. Jordan (ed.) *Crestomație romanică*, I. București, pp. 197-206.
- Peco, A. (1985) *Pregled srpskohrvatskih dijalekata*. Beograd, treće izdanje.
- Pușcariu, S. (1937) "La Place de la langue roumaine parmi les langues romanes," in *Études de linguistique roumaine*. Cluj-București, pp. 3-54.
- REW = Meyer-Lübke, W. (1972) *Romanisches etymologisches Wörterbuch*. Heidelberg, fünfte Auflage.
- Rosenkranz, B. (1955) "Die Gliederung des Dalmatischen," *ZRPh*, LXXI, 269-79.
- Rosetti, A. (1965) "Balcano-romanica," in *Linguistica*. The Hague, pp.231-33.
- (1968) "Sur l'appartenance du dalmate," in K. Baldinger (hrsg.) *Festschrift Walther von Wartburg zum 80. Geburtstag*, I. Tübingen, pp.71-74.
- Sampson, R. (ed.) (1980) *Early Romance Texts*. Cambridge.
- 下宮忠雄 (1977) 「マッテオ・バルトリ」『言語』6卷2号, 88-93頁.
- Skok, P. (1926-34) "Zum Balkanlatein," *ZRPh*, XLVI, 385-410; XLVIII, 398-413; L, 484-532; LIV, 175-215, 424-99.
- (1931) "Les Origines de Raguse," *Slavia*, X, 449-98.
- (1943) "Considérations générales sur le plus ancien istro-roman," in *Sache, Ort und Wort. Jakob Jud zum sechzigsten Geburtstag*. Genève-Zürich-Erlenbach, pp.472-85.
- Solta, G. R. (1965) "Palatalisierung und Labialisierung," *Indogermanische Forschungen*, LXX, 276-315.
- (1980) *Einführung in die Balkanlinguistik*. Darmstadt.
- Steinhauer, H. (1973) *Čakavian Studies*. The Hague-Paris.
- 菅田茂昭 (1994) 「M.バルトリ生誕120年と空間言語学」『ロマンス語研究』27号, 73-80頁.
- Tagliavini, C. (1981) *Le origini delle lingue neolatine*. Bologna, sesta ed., VI ristampa.
- Vidos, B. E. (1956) *Handboek tot de Romaanse Taalkunde*. 's-Hertogenbosch.

- Whatmough, J. (1954) "Review of Julius Pokorny, *Indogermanisches etymologisches Wörterbuch*, Fasc. 8, Bern, 1954," *Language*, XXX, 399-401.
- (1970) "Κελτικά," in *The Dialects of Ancient Gaul*. Cambridge, Mass., pp.1-85.
- Wrocławska, E. (1988) *Słowotwórstwo rzeczowników w sztokawskich tekstach XVI-XVII w. z Dubrownika*. Wrocław.
- 山末一夫 (1977) 「ダルマティア語音素論」『大阪外國語大學學報』39, 297-312頁.
- Ziliotto, B. (1924) *Storia letteraria di Trieste e dell'Istria*. Trieste.